



TITLE:

カメルーン南西部,エジャガム社会
の仮面文化に関する人類学的研究(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

佐々木, 重洋

CITATION:

佐々木, 重洋. カメルーン南西部,エジャガム社会の仮面文化に関する人
類学的研究. 京都大学, 1997, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

1997-03-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/202371>

RIGHT:

氏 名	さ さ き しげ ひろ 佐 々 木 重 洋
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 14 号
学位授与の日付	平 成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間・環 境 学 研 究 科 人 間・環 境 学 専 攻
学位論文題目	カメルーン南西部, エジャガム社会の仮面文化に関する人類学的研究

論文調査委員	(主 査) 教 授 金 坂 清 則	教 授 市 川 光 雄	教 授 田 中 二 郎
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

アフリカのカメルーンとナイジェリアの国境地帯を流れるクロス・リバー流域には、周囲のバントゥー語系あるいはクワ語系の民族とは異なった言語・文化を有する諸民族が居住している。なかでもカメルーン西部の熱帯雨林域に住む焼畑農耕民エジャガムは、独特の仮面文化を有することで知られている。本研究は、1993年から1995年の間、延べ15カ月間に及ぶ現地調査によって集められた資料をもとにして、このエジャガム社会の仮面文化に関する人類学的な記載と分析を試みたものである。

申請者はまず、エジャガム社会のいわゆる仮面に該当するものの中に、狭義の仮面オクムと「呪薬」に相当するンジョムの2種類が含まれていることを示したのち、各々のカテゴリーに含まれる合計7種の仮面について、その名称と由来、仮面の形態と色彩、素材や寸法、また仮面着用時につける衣装や呪具その他の所持品等について、それらが表す意味や象徴性に着目しながら詳細に記述している。さらに、これらの仮面を管理し、使用する各々の結社における厳格な行為規範とそれによって支えられた階梯制度や、結社への加入と昇格の儀礼等について述べたあと、それらの結社がおこなう仮面パフォーマンスについて豊富な事例をあげながら報告している。

申請者は、このようなエジャガム社会の仮面文化および仮面を用いたパフォーマンスについての民族誌的記載に基づいて、以下のような指摘をおこなっている。

第1に、仮面とその衣装、所持品などは、超自然的な力や、そうした力を備えた存在(豹やワニなど)を象徴していること、また、仮面を用いたパフォーマンスも全体として事物の起源や社会の規範、理念などを示したものが多いことを示し、細部の特徴からパフォーマンスに至るまでの、仮面文化の全体が豊かな象徴性を表出したものであることを指摘している。第2に、結社の内部には秘密の知識の保持にかかわる厳格な階梯制度が存在し、それがエジャガム社会の権力基盤になっていることや、仮面パフォーマンスによって社会の規範や理念が再確認されること、さらには仮面の匿名性を利用した犯人探しやその処罰がおこなわれることなどを示し、仮面結社とそのパフォーマンスが社会的な統制にかかわることを明らかに

している。

これらの象徴論的あるいは機能主義的な分析に加えて、申請者は、仮面文化のもつ歴史性にも着目し、通時的な分析をおこなっている。すなわちまず、現在のエジャガムの仮面や呪具、あるいはそれらの素材には、ナイジェリアや西欧社会などの外部社会から調達したものが少なくないが、そもそもかれらの仮面やそのパフォーマンスがナイジェリアなどの周辺の諸民族との文化接触を通して形成されたものであることを明らかにしている。また、鏡や電話器、武器、プラスチック製品、あるいは結社の軍隊的組織など、西欧文明との接触を通して多くの外来の物品やスタイルがエジャガムの仮面文化の中に取り入れられ、それらに新しい意味が付与されていることを示し、従来は保守的なものと認識され、固定的にとらえられていた仮面儀礼が実は柔軟性と創造性を備えたものであることを指摘している。次に、代表的な仮面であるオバシンジョムについて、歴史資料や民族誌写真、口頭伝承を分析した結果、ドイツの苛酷な植民地支配によって病人や死者が続出するといった危機に直面したエジャガムが、この危機に対処するために、災因究明手段である妖術者摘発の儀礼を在来の狩猟儀礼と結合させて、現在見られるようなオバシンジョムをつくりあげたことを示すなど、仮面文化成立の歴史的な背景についても明らかにしている。さらに、仮面およびそれを用いたパフォーマンスには、開村時のエピソードや奴隷交易、植民地化といった歴史的事件が色濃く投影されていることに注目し、これらのパフォーマンスが人々の歴史的経験を編成・組織する場ともなっていることを指摘している。

最後に申請者は、仮面を用いたパフォーマンスには成功例と失敗例が存在することから、儀礼パフォーマンスとしての成否が広義の娯楽としての演出の成否にかかっていることを示すとともに、仮面文化の理解には、仮面活動を支える人々の感性的側面の把握が重要であることを強調している。

論文審査の結果の要旨

カメルーンとナイジェリアの国境地域を通り、ギニア湾に流れ出るクロス・リバー流域には、周囲のバントゥー語系やクワ語系の民族とは異なる言語・文化をもつ諸民族が居住している。この地域は、河川（クロス・リバー）を利用した奴隷や森林産物の交易を通して早くから西欧社会と接触していたが、それにもかかわらず、こうした交易の中継地であったことから、住民の文化や社会が比較的遅くまで温存されていた。とくに、この地域でさまざまな変容を受けながらも現代まで伝えられている仮面文化はきわめてユニークなものである。

しかしこのような独自性をもつにもかかわらず、この地域の諸民族、とくに本研究で対象としているエジャガム社会に関する人類学的な研究は、初期の植民地時代の行政官などによる報告を除いてほとんどないといってよい。また、この地域にみられる独自の仮面文化に関する研究も、断片的なものに限られていた。したがって、エジャガム社会の仮面文化の全貌について記載した本研究は、まず貴重な民族誌的貢献として評価できる。

次に、本研究の特色として、「物」としての仮面の形態や色彩、素材、寸法等に関する具体的かつ実証的な記述と分析をおこなった点があげられる。従来的人类学的な仮面研究においては、仮面の社会的機能や象徴性に関する意味論的研究が主流を占め、仮面そのものに関する詳細な記述はあまりおこなわれてこ

なかった。それらに関する研究は、仮面を民族芸術とみなす芸術学や美術史学がおこなわれてきたわけであるが、そこではもっぱら仮面の様式や美的価値に関心が注がれ、仮面のもつ社会的な機能や意味づけに関する考察が十分ではなかった。したがって本研究は、これまで別個におこなわれがちであった人類学的仮面研究と芸術学・美術史学的仮面研究を結合させる試みとしても評価できる。

近年、人類学において歴史的観点の重要性が指摘されている。いいかえれば、従来的人类学的研究において文化や社会の静態的、共時的な分析に関心が集まっていたことに対する批判が出ているわけであるが、本研究はこのような批判を踏まえて、仮面文化の通時的な分析をおこなっている。すなわち、エジャガム社会における仮面文化の成立や展開の過程を、仮面の様式や植民地時代の文献資料、新旧の民族誌写真、口頭伝承などの資料を援用して具体的に跡づけるとともに、そのような仮面文化を生み出した背景について、植民地支配や周辺諸民族との接触といった当時の歴史的状況から分析している。さらに、仮面を用いた儀礼やパフォーマンスが開村時や植民地支配下における人々の歴史的経験を表現していることに着目して、それらに関する具体的な記述をおこなうとともに、仮面およびそれを用いた活動が人々の歴史的経験を組織するものであるという興味深い指摘をおこなっている。この最後の点は、儀礼においては神話的時間が表現されとする従来の研究に対して、これらの仮面儀礼には現実の歴史的時間が表現されていることを示したものであり、本研究はこの点に関しても、儀礼研究に歴史的観点を導入し、そのことによって新たな見解を提出したものとして評価できる。

最後に申請者は、仮面を用いたパフォーマンスには成功例と失敗例が存在すること、そしてその儀礼としての成否が広義の娯楽性の演出の成否、すなわちそれに参加する人々の興奮と感動を巻き起こすものであるかどうかという点にかかっていることを指摘し、仮面活動を支える人々の感性的側面に注目する必要があるとしている。このような着眼も、本研究がユニークなものであることを示している。

なお、本研究は仮面文化に焦点をあて、理論的にも多くの成果を生み出したものであるが、今後は、仮面文化をエジャガムの村落生活や文化全体の中に位置づけることによって、さらに研究を発展させることが期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成9年1月31日、論文内容とそれに関連した事項について試問をおこなった結果、合格と認めた。